

[業務報告]

デジタル教材「初めて学ぶ〈正信偈〉講座」の解説

西河雅人・八橋大輔

1. はじめに

本願寺派総合研究所教学伝道研究室〈聖典編纂担当〉では、2013年から2018年にかけて、デジタル教材*¹を用いた「初めて学ぶ〈正信偈〉講座」（以下、「正信偈講座」）を開催してきた。デジタル教材は、アンケートを踏まえて毎年改訂を重ねてきており、2018年度開催分の理解度を問うアンケートの結果（平均）は、以下の通りである。

- ①よく分かった…30.35%
- ②少し難しいが分かった…57.8%
- ③難しくてよくわからなかった…4.65%
- ④無回答…7.1%

①と②の合計は約88%であり、デジタル教材を用いた講義形態は一定の成果を得られたと考える。

総合研究所では、「正信偈講座」で用いたデジタル教材のデータを配信する予定である。本稿は、デジタル教材を使って講義する際、講師が用いる補助資料として作成したものである。デジタル教材の各スライドに表記されている語句やイラストについて、補足を要すると思われる箇所に「要点」「出拠」「解説」「味わい」「例話」等を付し、本教材を用いた講座等の開催の一助となることを目的とした。

2020年は2月から新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が全世界に蔓延し、企業においてはテレワーク、オンライン会議が推奨され、教育機関においてもオンライン講義が増加している。寺院活動においても、通常の布教伝道の形態の維持が困難となっており、オンラインでの法要や法座活動を行う寺院が増加しつつある。そのような状況に鑑みれば、オンラインでの使用にも適したデジタル教材が期待されていることは明らかである。

なお、配信用のデジタル教材には全ての画像において、実演の際の補足説明を添付する予定だが、本稿は紙数の都合上、「正信偈」前半の「依経段」の特に補足説明を要するスライドについて解説した。

2. デジタル教材の制作と変遷

当研究所の〈聖典編纂担当〉では、聖典編纂業務において蓄積されてきた知見を

活かし、これまで編纂してきた聖教を、出来るだけ宗門内外の人々に認知されることを目的に、2010（平成22）年度より、初学者向けの入門講座を開始した。その際、浄土真宗の日常勤行として、門信徒にとって最も身近な聖教である「正信偈」を取りあげ、2013（平成25）年度より「初めて学ぶ正信偈講座」と題してデジタル教材を用いた講座を開始した。以下、概略を記す。

◆2013（平成25）年度…京都／聞法会館（1回完結の講座を4回実施）

- ①10:00～11:30（依経段／依釈段）
- ①13:00～14:30（依経段／依釈段）
- ①10:00～11:30（依経段／依釈段）
- ①13:00～14:30（依経段／依釈段）

2013年度は、1回（90分）完結で「正信偈」の概略を説明するものであった。しかし、アンケートに「情報量が多く、講義の速度が速い」「もっと一つ一つを詳しく聞きたい」との意見が多く見られ、全体の概略のみの説明では不十分との反省材料を得た。

◆2014（平成26）年度…京都／聞法会館（2回完結）

- ①10:30～12:00（依経段）
- ②10:30～12:00（依釈段）

2014年度は、「依経段」（90分）と「依釈段」（90分）の2回に分け、説明内容を増やして講座を行った。理解度としては「よく分かった」と「少し難しいが分かった」の合計平均（以下、理解度）が78.1%であり一定の評価を得たといえるが、講義の速度については、「速い」と「少し速い」の合計平均が79.3%もあり、かなり急いだ印象を与えてしまった。

◆2015（平成27）年度…京都／聞法会館（4回完結）

- ①10:00～12:00（依経段／弥陀章）
- ②10:00～12:00（依経段／釈迦章）
- ③10:00～12:00（依釈段／龍樹・天親・曇鸞）
- ④10:00～12:00（依釈段／道綽・善導・源信・源空）

2015年度は、「依経段」を弥陀章と釈迦章に分け、「依釈段」を上三祖と下四祖に分けた全4回完結の連続講座を行った。その結果、理解度の平均が93.2%と高評価を得、講義速度も「ちょうどよい」が77.3%と高評価を得た。しかしアンケートでは更に依釈段の七祖の教えを詳しく聞きたいという要望が多く見られた。

◆2016（平成28）年度…京都／聞法会館（5回完結）

- ①〈午前〉10:00～12:00（依経段／弥陀章）
- ②〈午後〉13:00～15:00（依経段／釈迦章）
- ③〈午前〉10:00～12:00（依釈段／龍樹・天親）

- ④〈午後〉 13:00～15:00 (依釈段／曇鸞・道綽・善導)
- ⑤〈午前〉 10:00～12:00 (依釈段／源信・源空)

2016年度は、「依経段」は2分割のまま、「依釈段」を詳しく説明するため、印度(二祖)・中国(三祖)・日本(二祖)の3分割として、全5回完結の連続講座を行った。その結果、理解度の合計平均が93.6%となり、講義速度も「ちょうどよい」が70.8%であった。

◆2017(平成29)年度…神戸別院(5回完結)

2017年度は、前年度と同じ全5回完結の内容を踏襲し、会場を京都の間法会館から神戸別院に移して講座を開催した。しかし理解度の合計平均が86.3%と若干下がり、講義速度も「ちょうどよい」が53.3%であった。これは初めての地方開催での緊張感が影響したと思われるが、依釈段の理解度を深めようと説明内容(スライド)を増やした結果、逆に講義が速くなり、理解度の低下を招いたと反省させられた。

◆2018(平成30)年度…和歌山／鷲森別院・名古屋／西別院(6回完結)

- ①〈1部〉 13:30～15:05 (依経段／弥陀章)
- ②〈2部〉 15:25～17:45 (依経段／釈迦章)
- ③〈1部〉 13:30～15:05 (依釈段／七祖概説・龍樹)
- ④〈2部〉 15:25～17:45 (依釈段／天親・曇鸞)
- ⑤〈1部〉 13:30～15:05 (依釈段／道綽・善導)
- ⑥〈2部〉 15:25～17:45 (依釈段／源信・源空)

2018年度は、「依釈段」の情報量と講義速度に配慮して、内容を更に「①七祖概説・龍樹」「②天親・曇鸞」「③道綽・善導」「④源信・源空」の4分割とし、全6回完結の講座を、和歌山(鷲森別院)と名古屋(西別院)にてほぼ同時期に開催した。アンケートの結果、理解度は和歌山86.8%、名古屋89.5%と高評価を得、講義速度も「ちょうどよい」が和歌山68.9%、名古屋67.3%とまずまずの評価を得た。

配信予定の「初めて学ぶ正信偈講座」のデジタル教材については、この全6回完結のスライドデータを元に、更に内容や表記の統一化をはかり作成していく予定である。また海外に向けても、開教区各国の別院を通して門信徒への教化活動を行ううえでのコンテンツの一つとなり得る可能性がある。

3. スライド画像の主な表記及び動作基準

(1)「正信偈」本文、及び引用文に関しては原則として縦書きとした。

※引用文は主に『浄土真宗聖典』(註釈版第二版)、『浄土真宗聖典』(註釈版七祖篇)、『浄土真宗聖典』(現代語版)に収録された聖教とし、該当頁数を()内に示した。

- (2)解説内容は主に横書きとし、強調文字は赤字などの彩色で示した。
- (3)阿弥陀仏、釈尊、親鸞聖人、仏弟子などの主要なイラストは、当研究所にて作成したオリジナルであるが、その他のイラストはインターネットから入手可能な著作権等をクリアした素材を使用している。
- (4)「正信偈」本文の冒頭の数字は、別資料の「共通資料（正信偈全文／現代語訳）」の通番号である

【註】

*1 デジタル教材は、カスタマイズが可能であるが、文言などを変更・追加する際は、浄土真宗の教学に基づき行う必要がある。

4. 主要スライドの解説

I 依経段（前半）…阿弥陀仏の願いと救い「帰命無量寿如来～必至滅度願成就」

(1)「正信偈」の概略

※(註～頁)…『註釈版聖典』（第二版）の頁数

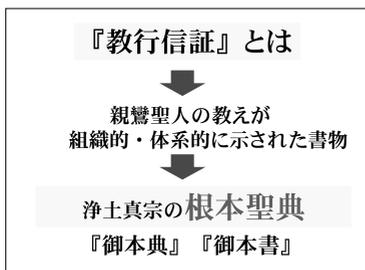
「正信偈」とは…

- ・親鸞聖人の制作
- ・詳しくは「正信念仏偈」



親鸞聖人
1173年5月21日(寛安3年4月11日)～
1262年4月6日(弘長2年2月28日)

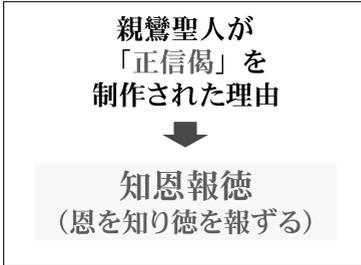
- 「正信偈」は親鸞聖人の書かれた漢讃（漢詩で仏徳を讃嘆された詩）であり、釈尊の説いた経典ではないので「お経」ではない。
- 「正信偈」という略称も親鸞聖人の『尊号真像銘文』（註670頁）に「和朝愚禿釈親鸞正信偈の文」とある。「念仏」が省略されているところからも、「信心」に重点をおかれていることがわかる。信心が往生の正因であり、称名は信後の報恩行とされる。



- 親鸞聖人が52歳の時、元仁元年（1224）、関東の常陸の国〈茨城県〉の稲田において『教行信証』の草稿本は一応完成したとされており、この年を立教開宗と定められている。しかし、親鸞聖人は晩年まで推敲を重ね、加筆訂正されている。
- 「正信偈」には『教行信証』一部六巻が凝縮されている。「正信偈」を学ぶということは、真宗教義の全てを学ぶと言っても過言ではない。昔から「正信偈がわかれば、真宗がわかる」と言

われている。

- 現存する『教行信証』には、鎌倉三本といわれる、「坂東本」（真宗大谷派蔵親鸞聖人真筆本）・「高田本」（高田派専修寺蔵真仏上人書写本）・「西本願寺本」（本派本願寺蔵鎌倉時代書写本）が有名である。



- 「知恩」とはなされた恩を知ること、私に向けられた阿弥陀仏の願いによって念仏する身に育てられたご縁を知ること。
- 「報徳」の「徳」とは功德のことであり、私を浄土に向かわせる阿弥陀仏のはたらきである。「報」とは「恩徳」をいただいた私が、感謝せずにはいられないと喜ぶ心。
- 親鸞聖人の『正像末和讃』にある「恩徳讃」は仏教讃歌として馴染み深い。



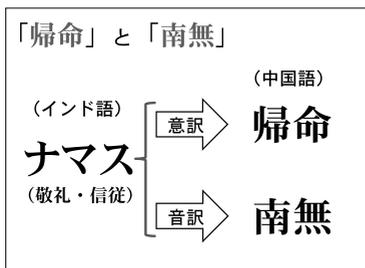
- 本願寺中興の祖、蓮如上人のご功績の一つ。
- 『實悟記』によると、存如上人（第七代宗主・蓮如上人の父）の時代までは、日常勤行は善導大師の制作された『往生礼讃』（六時礼讃）であった。蓮如上人は『教行信証』から「正信偈」を抜き出し、親鸞聖人の晩年の作である「三帖和讃」と合わせて、『正信偈和讃』を制作し日常勤行に改めた。以来550年近くもその伝統が続いている。
- 蓮如上人は文明五年（1473）に、越前（福井県）吉崎にて、「三帖和讃並びに正信偈（正信偈和讃）」四帖一部を木版印刷で開版された。
- ドイツの神学者、マルチン・ルターがドイツ語翻訳聖書を初めて印刷刊行したのは1522年であり、「正信偈」刊行のおよそ50年後であった。

(2)親鸞聖人の信の表明（帰敬序）

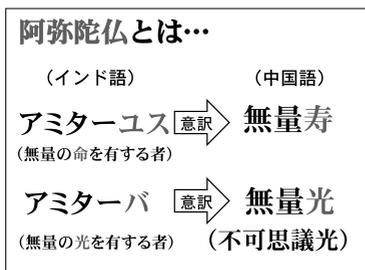
「帰命無量寿如来 南無不可思議光」（2句）

現代語訳：限りない命の如来に帰命し、思いはかることのできない光の如来に帰依したてまつる。

※冒頭の2句は名号を表しているとする説があるが、鎌倉三本には一致して、「無量寿如来に帰命し、不可思議光に南無したてまつる」との訓点が付されているため、親鸞聖人ご自身の信の表明が述べられた帰敬序とされる。



- この「帰命」は「帰順勅命」のことで、「必ず救う、我にまかせよ」という阿弥陀仏の勅命に帰順するという意味である。この勅命とは阿弥陀仏の呼びかけであり、呼びかけ通りにさせる強いはたらきを持つ。
- 「南無」は古代インド語（梵語）「ナマス」の発音を同じ字音の漢字で表記したもの。
- 本願寺派では「南無」は「なも」と読む。親鸞聖人の『西方指南鈔』（『聖典全書』宗祖篇下923頁）には、「南无」に「なも」と振り仮名が付されている。
- 称名念仏とは「南無阿弥陀仏」と口に称えることであり、それが元は古代インドの言語であり、漢字そのものには意味は無いが、浄土教が日本全国に広がり一般大衆が称えることによって、日本語として慣用化されていった。



- 「無量寿」とは、阿弥陀仏が時間的に過去・現在・未来いつの時代であっても迷える者を救おうとはたらいていることを意味している。
- 「無量光」とは、阿弥陀仏が空間的にありとあらゆる世界の迷える者を救おうとはたらいていることを意味している。
- 「無量光」は「正信偈」の「不可思議光」を指している。光明については、後に十二光としてそのはたらきが表現されている。

阿弥陀仏は…
いつでも
どこでも
私を救おうと
はたらかれています



- 阿弥陀仏は、「いつでも」（時間的無限）、「どこでも」（空間的無限）迷える者を救おうとはたらいている仏である。
- ただ「いつでも・どこでも」と言っても、重要なのは、その救いの目当ては他の誰でもなく、この「私」であるということである。
- 親鸞聖人は「正信偈」のこの冒頭の二句で、「私の命の依りどころは阿弥陀仏である」と宣言され、この二句は「正信偈」全体の序分となっている。

(3)阿弥陀仏の願い（弥陀章） *弥陀成仏の因果*

「法蔵菩薩因位時～重誓名声聞十方」（8句）

現代語訳：法蔵菩薩の因位のときに、世自在王仏のみもとで、仏がたの浄土の成り立ちや、その国土や人間や神々の善し悪しをご覧になって、この上なくすぐれた願をおたてになり、世にもまれな大いなる誓いをおこされた。五劫もの長い間思惟してこの誓願を選び取り、名号をすべての世界に聞こえさせようと重ねて誓われたのである。



阿弥陀仏は
どのようにして
仏になられたか

10 重誓名声聞十方
3 法蔵菩薩因位時

- この箇所は「弥陀章」ともいい、「正信偈」では先ず阿弥陀仏の因位の法蔵菩薩の誓願建立を讃えられる。
- ここは帰敬序の二句の「無量寿如来・不可思議光」が主語で、三句目からは、この阿弥陀仏が法蔵菩薩であった時と続く。
- 仏教では通常、釈迦・弥陀の順序で説かれることが多いが、親鸞聖人は釈尊の説法である『仏説無量寿経』（略して『大経』）は、阿弥陀仏の本願に基づいて説かれているとみて、弥陀・釈迦の順で讃えられる。『歎異抄』の第二条には「弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。」（註833頁）とあり、釈尊の説教の真実性の根拠は、弥陀の本願にある。



阿弥陀仏の誓願が説かれたお経
『仏説無量寿経』（大経）



法蔵菩薩

- ・もとは国王
- ・名誉も財産も捨て、修行者に…
- ・のちに阿弥陀仏となる菩薩

○「正信偈」の依経段は、浄土真宗で最も大切にされている経典、『大経』の正宗分（弥陀成仏の因果・衆生往生の因果・釈尊の勸誡）に依ったもの。（写真は本願寺御蔵版の折り本「浄土三部経」）

- 『大経』には、阿弥陀仏の誓願（四十八願）が説かれており、親鸞聖人は『教行信証』「教巻」にて「それ真実の教を顕さば、すなはち『大無量寿経』これなり」（註135頁）と述べている。
- この『大経』と『観無量寿経』（観経）と『阿弥陀経』（小経）を合わせて、「浄土三部経」という。

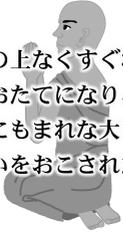
○「法蔵」とは、梵語「ダルマーカラ」（ダルマ・アーカラの略）の漢訳語。「法」（ダルマ）は真理・教法、「蔵」（アーカラ）は根源・蓄積を意味する。

○「菩薩」とは、梵語「ボディーサットヴァ」の漢訳語。仏道を求め、衆生を教化して共にさとりをめざすものという意味。

○「法蔵菩薩」とは、真理を蓄積し、出生する根源であるような菩薩。普通の人間の修行者ではなく、世俗を超越した絶対の真理を説いて、一切衆生に知らせんとする存在という意味を表した名前。

○説話の意味は、最高の富と権力と名誉を持つ国王（世俗の王様）が、世自在王仏に出遇い教えを聞いて、世俗の空しさを知り、仏に帰依して弟子となり、世俗のすべてを捨て去るというもの。

この上なくすぐれた願い
をおたてになり、
世にもまれな大いなる
誓いをおこされた



8 7 建立無上殊勝願
超発希有大弘誓

- 法蔵菩薩の四十八願は四十八誓願ともいう。法蔵菩薩が阿弥陀仏と成られたということは、この四十八誓願はすべて成就されている。
- 「願い」とは法蔵菩薩が、もしも私が仏と成ったなら、このような仏になり、このような浄土を作り、そしてあらゆる衆生を救いたいという願いであり、「誓い」とは、この願いがすべて成就しなければ、私は仏にならないと誓うことをいう。
- 法蔵菩薩の誓願は四十八願であるが、ここでは「無上殊勝の願」「希有の大弘誓」とあるので、これは根本の願（本願）である第十八願を指す。

五劫もの長い間思惟して
この誓願を選び取り、



9 五劫思惟之摂受

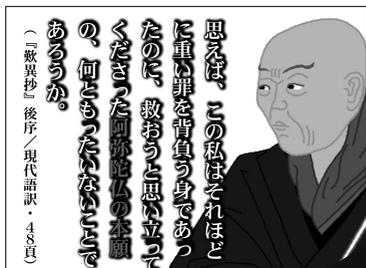
- 「劫」は古代インド語（梵語）カルパの音写。インドの時間の単位で、極めて長い時間を表す。この長さを表す譬喩に盤石劫と芥子劫があるが、どれも日常的な感覚を超えた無限の時間を表す単位である。
- 無限ともいえる時間をかけて完成したという本願は、それが完全無欠なるもの、完璧なものであることを表現している。真理・法則は永遠の時間が経過しても不変であることの象徴ともいえる。
- 名号は、無限ともいえる時間をかけて立てられた、法蔵菩薩の誓願が成就した結晶であり、完全無欠な真理として機能している。

盤石劫



40里（約160km）
四方の石を100年に一度、天女が
羽衣でなでる…

- 盤石劫の譬喩の場合、日本の里法（尺貫法）では1里は約4kmで、岩の一边（40里）は160kmほどになるが、中国の里法では1里は約500mであり、岩の一边は20kmほどになる。
- 芥子劫の譬喩は、一边が40里の立方体の城に芥子粒を満たし、100年に一度一粒を取り出し、全ての芥子粒が無くなるまでを一劫とする。



○阿弥陀仏は迷いの世界から離れる可能性を一切持たない存在である私を、悟りの世界に生まれさせようという願いを起こされたが、私の悪業・煩惱が大きすぎて、これを思案するのに五劫という長い時間をかけられた。つまり、「五劫」という言葉からは、私を救うことがいかに難事であったかを味わうことができる。

○他の諸仏には出来なかったが、阿弥陀仏は永遠ともいえる時間を費やして私を救う方法を、完璧に仕上げてくださいました。



○法蔵菩薩は、誓願を完成するために、永遠ともいえる長い時間をかけてご修行された結果、阿弥陀仏となられた。つまり、法蔵菩薩の誓願は、今や願いにとどまらず、今や現実に具体的な阿弥陀仏の本願成就の名号となって、私を救うために活動している。

○法蔵菩薩の第十七願は、名号を十方の諸仏に讃えさせようと誓われた願で、これは十方の衆生に名号を普く至らせるためであった。この世界では釈尊が『大経』をお説きになって、今現に私に至りとどいている。

(4)阿弥陀仏の光明による救い（弥陀章）

「普放無量無辺光～一切群生蒙光照」（6句）

現代語訳：本願を成就された仏は、無量光・無辺光・無礙光・無対光・炎王光・清浄光・歓喜光・智慧光・不断光・難思光・無称光・超日月光とたたえられる光明をは放って、広くすべての国々を照らし、すべての衆生はその光明に照らされる。



- 阿弥陀仏の光明の徳を12種に分けて讃嘆したもので『大経』に説かれている。
- 最初の無量光は十二光の全体を総じて表したもので、「アミターバ」そのものである。
- 無量光とは、量的に無限ということだけでなく、時間的にも永遠に照らし続けるというはたらきがある。
- 無量の光明が必要なのは、阿弥陀仏の本願を知らずに迷っている衆生が無量に存在しているからである。



- 無辺とは際限が無い、即ち空間的な普遍性、無限性を表している。
- 無辺とは善人と悪人、賢者と愚者、男女の別や年齢の相違を区別しない絶対平等の救いを表す。
- 無辺とは中心点が存在しない。よってどこに居てもそこが中心となる。つまり、誰もが阿弥陀仏の救いの中心にいる。『歎異抄』後序（註853頁）で、阿弥陀仏の本願建立を、「弥陀五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」という味わいがこれである。



- 無礙とは障害するものが無いという意であると同時に自由自在のはたらきを表す。
- 私の持つどんな悪業も煩惱も阿弥陀仏の救いの障害とはならない。救済力の絶対性を表している。
- 『歎異抄』の第七条（註836頁）に「念仏者は無礙の一道なり」とある。そこには「信心の行者には天神・地祇も敬伏し、魔界・外道も障礙することなし。罪悪も業報を感ずることあたはず、諸善もおよぶことなきゆゑなり」とある。
- 親鸞聖人は、十二光の要は無礙光とされている（親鸞聖人御消息／註793～

794頁)。また、『弥陀如来名号徳』(註730~731頁)では、無礙光仏を「不可思議光仏と申すとみえたり」と述べ、それは「正信偈」の「南無不可思議光」と同じである。



- 「清浄」とは汚れが無いことであり、阿弥陀仏の光明には煩惱の汚れが微塵も無いことを表す。
- 「清浄」とは浄化するはたらきでもあり、阿弥陀仏の光明に照らされた者は、あらゆる悪業煩惱が浄化されて、彼の浄土に往生することができる。
- 三毒の煩惱の「貪欲」を対治する光明。



- 怒り・はらだちの罪を除き、衆生に仏法を喜ぶ心を得させる光明。
- 阿弥陀仏の光は大いなる慈悲で、私を包んでいる。どんな時でも一人ではないとの安心感が喜びとなる。
- 三毒の煩惱の瞋恚を対治する光明。



- 阿弥陀仏は光と命の限りない仏であるが、その光は仏の智慧を象徴している。
- 阿弥陀仏の智慧の光に照らされたなら、物事をありのままに見る眼をいただくことができる。それは煩惱具足の私の本当の姿に気づかされるということである。親鸞聖人は「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」(歎異抄・第二条・註833頁)と言われた。
- 三毒の煩惱の「愚癡」を対治する光明。



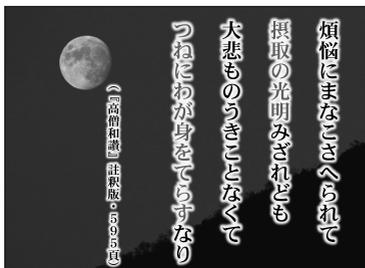
- 「不断」とは、阿弥陀仏のはたらきは止まることがないということで、時間的な永続性を表す言葉でもある。
- 私が寝ている時でも、喜び、悲しみ、怒り、様々な感情で阿弥陀仏のことを忘れてしまう時でも、阿弥陀仏は一瞬の休みもなく、私を照らしている。



- 「難思」とは私の思慮、考えが及ばないという意味で、「不思議」「不可思議」と同じ言葉。仏以外に思いはかることができない光明のことで、阿弥陀仏の徳の不可思議性を表す。また考えが及ばないとは驚きと尊敬の意味を表す。
- 本来ならば地獄に墜ちるしかない私が救われるということは、「信じられない」ほど素晴らしいことが起こったという驚嘆である。



- 「称」は「説き示す」という意味で、如来の徳は言葉を超越していることを表す。
- 「言葉では説き示せない」ということは、経験したこともない感動が私に起こったことだといえる。つまり本当に感動できるものに出遇ったら、その感想を述べる言葉は出てこない。
- 「無称」とは、阿弥陀仏に対して、私の感想もほめ言葉も何の意味も持たないことを表している。阿弥陀仏の光明はそれほど絶対的な光ということである。

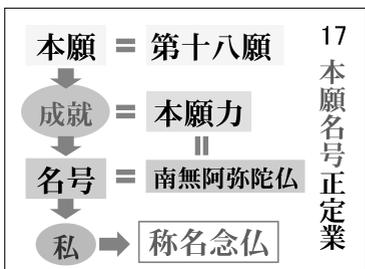


- 親鸞聖人は『高僧和讃（源信讃）』（註595頁）に、「煩惱にまなこさへられて～つねにわが身をてらすなり」と詠まれている。もとは、七高僧の第六、源信和尚が『往生要集』で述べられているご文で、親鸞聖人はほぼそのまま和讃にしている。
- 撰取の光明に包まれていても、私の煩惱に濁った眼では、その光明を見ることはできない。しかし、阿弥陀仏はあきることなく、昼も夜もつねに私を照らしている。

(5)阿弥陀仏の名号による救い（弥陀章）

「本願名号正定業～必至滅度願成就」（4句）

現代語訳：本願成就の名号は衆生が間違いなく往生するための行であり、至心信楽の願（第十八願）に誓われている信を往生の正因とする。



- 「本願」とは根本の願という意味で「第十八願」を指す。特に『教行信証』においては、「本願」とあればすべて「第十八願」を意味し、その他の願は「願」と表記されている。
- 本願が成就して、願いがはたらきとなることを「本願力」という。この本願力が南無阿弥陀仏の名号であり、この名号が私の口から出て称名念仏となる。
- 称名念仏の主体は衆生であるが、親鸞聖人は「本願名号正定業」と言われ、主体を阿弥陀仏の名号に転換された。この場合の「本願名号」とは、第十八願に誓われた「乃至十念」の称名念仏である。



- ①阿弥陀仏の名号（名前）は「阿弥陀」の三字であるが、親鸞聖人は『唯信鈔文意』（註699頁）に「尊号と申すは南無阿弥陀仏なり」と示され、六字全体を名号をされる。
- ②「南無」の二字は「歸命」であり、阿弥陀仏の名前ではなく、衆生の側の歸依信願を表す心境であるが、これも含めて名号とされる。即ち、私が南無する心も阿弥陀仏からいただいたものといえる。

〈例話〉何も知らずに生まれてきた子供が、やがて「パパ」「ママ」、「おとうちゃん」「おかあちゃん」と親を呼ぶのは、親が子どもに向かって、「私がママよ」などと自分の呼び名（名号）で呼びかけているからです。その親の喚び声は、子どもの安心（信心）となり、親のことを「ママ」「おかあちゃん」と呼ぶ（念仏）ようになる。



- 第十八願には「至心信樂欲生」（欲生は省略）と誓われているため、この願名がある。他に「念仏往生の願」「選択本願」「本願三心の願」「往相信心の願」などの願名がある。
- 『尊号真像銘文』には、「〈至心信樂願為因〉といふは、阿弥陀如来回向の眞実信心なり、この信心を阿耨菩提の因とすべしとなり」（註671頁）とあり、信心は阿弥陀仏が回向して下さった「南無」の心で、この信心が成仏の因となる。

信心

↓

**阿弥陀仏の本願に
疑いや自分の理解を
まじえない心の状態**



18 至心信樂願為因

- 私たちは、自分で理解して判断しようとあれこれ考える。私の煩惱具足の心では、阿弥陀仏の本願を疑いなく、信ずるということは不可能である。この信心は阿弥陀仏からの賜物であって、私が判断し、納得する心ではない。ただ「はい」とうなずき、おまかせする他は無い。
- 信心とは、私が「疑わない心」ではなく、「疑う心のない状態」をいう。

『尊号真像銘文』



「成等覚証大涅槃」ということについては、「成等覚」というのは正定聚の位につくことである。この位を龍樹菩薩は「即時入必定（即のときに必定に入る）」といわれており、曇鸞和尚は「入正定之数（正定の数に入る）」と示されている。これはすなわち弥勒菩薩と等しい位である。

（註釈版・671頁）

- 『尊号真像銘文』において、親鸞聖人は「正信偈」の「本願名号正定業～即横超截五悪趣」までの20句を端的に解説されているため参考になる。
- 龍樹菩薩の「即時入必定」（易行品）は、「正信偈」依积段の龍樹章に「憶念弥陀仏本願 自然即時入必定」とあり、親鸞聖人の現生正定聚の論拠とされている。
- ここでは「等覚」や「正定聚」が「弥勒菩薩と等しい位である」と述べられるところに注目したい。

等覚（等正覚）

||

正定聚のこと

浄土に往生して
さとりを開くことが
正しく定まった聚
（なかま）

19 成等覚証大涅槃

- 等覚は「等正覚」のことで二つの意味がある。一つは「仏のさとり」そのもので「平等の正覚」という意味。次に「最高の菩薩の位」と云う意味もある。「等」には正覚とほとんど等しいという意味があり、この等覚の菩薩で有名なのが弥勒菩薩。
- 「正信偈」では、「等覚を成る」とは「正定聚」の位につくことをいう。浄土に往生して成仏することが決定した仲間という意味がある。
- 親鸞聖人は「等覚を成る」と「大涅槃を証する」を分け、「等覚」は最高の菩薩の位（因）、そして「大涅槃」は仏の位（果）と言われる。

「親鸞聖人御消息」

真実の信心を得た人は、阿彌陀仏が摂め取ってお捨てにならないので正定聚の位に定まっています。
(現代語訳・3頁)

※本願他力の救いでは、自分の力ではなく、阿彌陀仏の光明に摂め取られて、決して捨てられることがないので往生成仏が決定する。



○正定聚とは「成仏が決定した仲間」という意味であるが、自力の仏道においては、自らの修行によって高い境地に至り、やがて成仏間違いない身（不退転）となる。一方他力本願の救いでは、真実の信心を得た者は、自らの力で高い境地に至るのではなく、阿彌陀仏の摂取不捨の光明に摂め取られて、浄土に往生するまで決して捨てることがない（摂取不捨）ので、「成仏が決定した仲間」（正定聚）といえる。

「教行信証」 「証巻」冒頭

さて、煩惱にまみれ、迷いの罪に汚れた衆生が、仏より回向された信と行とを得ると、たちどころに大乘の正定聚の位に入るのである。
(現代語訳・329頁)

現生正定聚の利益



○親鸞聖人は、『教行信証』「証巻」の冒頭で、「しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即のときに大乘正定聚の数に入るなり」（註308頁）と述べられ、正定聚を信心を獲得したその時に得る利益とされている。これが親鸞聖人の教義の発揮ともいえる「現生正定聚」である。

最高の位（等覚）の菩薩

彌勒菩薩

現在兜率天においてご修行中



○彌勒は梵語マイトレーヤの音写。彌勒菩薩は現在の一生を過ぎると、釈迦仏のあとを補って仏と成る「一生補処の菩薩」として、現在兜率天の内院に住し、天人のために説法している。

○釈尊入滅後五十六億七千万年の後にこの世に下生して、竜華樹の下でさとりをひらき、衆生を救済するために三回説法するといわれる（竜華三会の説法）。

○京都の広隆寺の彌勒菩薩半跏思惟像（木像）は特によく知られており国宝に指定されている。ただし、半跏思惟像の全てが彌勒菩薩像であるとは限らない。

親鸞聖人
**信心をよろこび
 念仏を称える者**
 〓
等覚（正定聚）
 〓
弥勒菩薩と同じ位



- 親鸞聖人は、念仏の行者もこの一生が終われば、直ちに浄土に生まれて仏となるのだから、弥勒菩薩と同じであると言われる。
- 弥勒菩薩と同じ位だからといって、私が弥勒菩薩のような勝れた菩薩になれるわけはなく、私は臨終に至るまで、外面的にも内面的にも煩惱にまみれた凡夫であることに変わりはない。
- 凡夫が「弥勒と同じ」という最高の利益を得ることができるのは、阿弥陀仏の本願成就の名号をいただいているからである。

親鸞聖人
**信心をよろこび
 念仏を称える者**
 〓
 この世の命を終える臨終の時
 阿弥陀仏の浄土に往生して
 仏のさとりをいただく
往生即成仏



- 現生において正定聚に住するということは、命終わって浄土に往生した時に、必ず滅度（涅槃）を得るということに他ならない。これを往生即成仏という。
- 不可思議なる本願成就の名号をいただいているものは、現生においては臨終に至るまで煩惱に縛られたままであるが、彼の浄土に往生すれば、直ちに仏のさとりを得ることができる。

II 依経段（後半）…お釈迦さまのおすすめ「如来所以興出世～難中之難無過斯」

①出世本懐 （しゅっせほんがいはい）

②信の利益

③自力の誠め

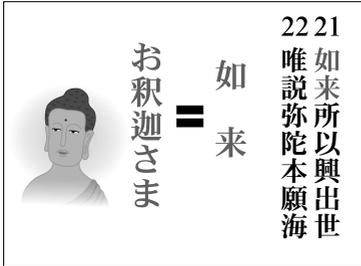
1. 不断得生
 2. 平等一味
 3. 心光摂護
 4. 横超五趣
 5. 諸仏称讃

- 依経段の後半、「釈尊の勸説」「釈迦章」などと言われる箇所、釈尊が説いた阿弥陀仏の本願の素晴らしさが述べられている。
- 構成は大きく三段に分かれる。①出世本懐は、釈尊が世に出られた目的が阿弥陀仏の本願を説くことにあることを示して、弥陀の本願が最もすぐれた教えであることを述べる。②信の利益は、本願を信ずることによって得る五つの利益が説かれる。②は計十六句あり、依経段（後半）の中心となるところである。③自力の誠めは、自力を捨て他力に帰すべきことを勧めるところである。

(1)出世本懐

「如来所以興出世 唯説弥陀本願海 五濁惡時群生海 応信如来如实言」
(4句)

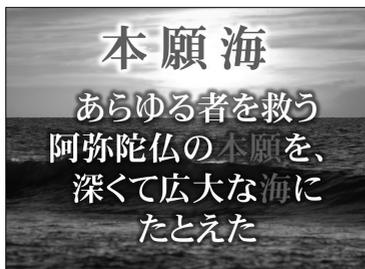
現代語訳：如来が、この世界にお出ましになられた本当の理由は、あらゆる者を救う阿弥陀仏のご本願の教えを説かなくてはならなかった。この濁り乱れた世に生きる人々は、お釈迦さまが説かれた真実の教えを信じるほかない。



- 「如来」は、『尊号真像銘文』に「〈如来〉と申すは諸仏と申すなり」（註671頁）と示されているように「諸仏」と解説するのが正確な表現であるが、本教材では分かりやすさを優先して「お釈迦さま」と説明している。
- 本教材では次スライドから、出世本懐の説明のため、釈尊の生涯を簡単に紹介している。

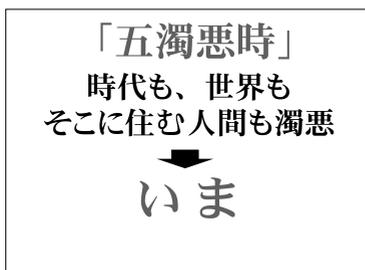


- 阿弥陀仏と釈尊の関係についての解説。釈尊に比べて阿弥陀仏のイメージが掴みにくいことから設けたスライドである。釈尊が2500年前にインドに誕生し80年の生涯を生きただけである一方、阿弥陀仏は、この世に実在した方ではなく、いつでもどこでもはたらく仏である。また、釈尊は救いのはたらきそのものである阿弥陀仏を言葉（経典）で説かれた方である。
- 「釈尊が説いたものでない経典を真実といえるのか？」という「大乘非仏説」に関する質問が出た場合は、「悟りをもたらす教えはすべて仏説である」という仏説観を紹介している。※『季刊せいてん』120号「あわてないための〈大乘非仏説〉入門」参照。



○本願の教えがなぜ最も素晴らしいのかを「本願海」という言葉から解説している。本願の教えは、どんなものでも包み込む深くて広い海のように、一部の智慧ある者だけでなく、どんな愚かな者でも救う教えであるから、最も素晴らしい教えである。(写真：親鸞聖人が流罪となった越後〈新潟県〉の居多ヶ浜)

○『教行信証』には、「〈海〉といふは、久遠よりこのかた、凡聖所修の雑修雑善の川水を転じ、逆誘闡提恒沙無明の海水を転じて、本願大悲智慧真実恒沙万徳の大宝海水となる。これを海のごとくに喩ふるなり」(註197頁)とある。



○「五濁悪時」とは、2500年前の釈尊や750年前の親鸞聖人の時代だけでなく、今の私たちの時代のことでもあることを強調。そんな時代に生きる私たちが救われる道は、釈尊が説いた阿弥陀仏の本願の教えしかない。

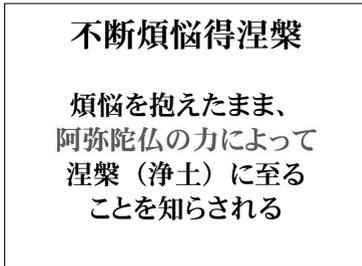
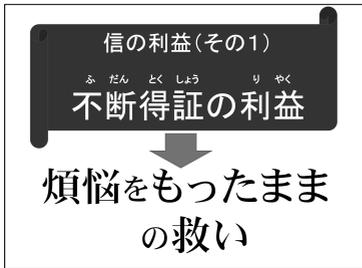
○「群生海」と「本願海」を対比し、海のように底知れない迷いを抱えている人間を救うものは、海のように底知れない深さを持った教えでなければならない、と味わう解釈がある。

(2) 信の利益

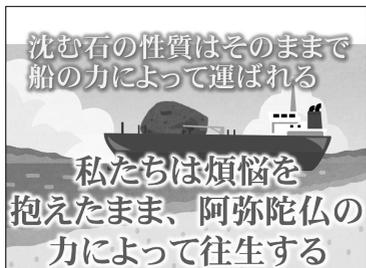
1 「不断得証」

「能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃」(2句)

現代語訳：信をおこして、阿弥陀仏の救いを喜ぶ人は、自ら煩惱を断ち切らないまま、浄土でさとりを得ることができる。



- 本願を信ずる利益として、煩惱を断ずることなく、阿弥陀仏の力によって救われることが示されるところ。
- 「能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃」で解釈が分かれるのが「得涅槃」であり、「得涅槃」を「現生正定聚」(現益)ととる解釈と、浄土往生後の「涅槃」(当益)ととる解釈がある。また「涅槃」ととる解釈では、「この身のままで往生する、と信知する」というような、句全体としては現生正定聚とする解釈があり、本教材ではこの解釈をとっている。現代語版の訳は「自ら煩惱を断ち切らないまま、浄土でさとりを得ることができる」となっており、当益説に基づいている(『教行信証(現代語版)』671頁)に現益・当益二説についての解説あり)。
- 『尊号真像銘文』には、「〈不断煩惱得涅槃〉といふは、〈不断煩惱〉は煩惱をたちすてずしてといふ。〈得涅槃〉と申すは無上大涅槃をさとるをうるとしるべし」(註672頁)と、「得涅槃」を当益で示されてある。
- 「不断煩惱得涅槃」について、「私たちが自ら煩惱を断ずる必要はなく、煩惱は阿弥陀仏によって断じられる」といった解説がなされる。現代語版の「自ら煩惱を断ちきらないまま」という表現もそれを踏まえたものと思われる。涅槃に至るということは煩惱を断じることであるという仏教の基本を踏まえた重要で正確な解説ではあるが、解説が難解になる恐れがあると考え、本教材では、「煩惱を抱えたこの身のままで、浄土に往生させていただく」という親鸞聖人の喜び・思いに焦点を当てた解釈をしている。

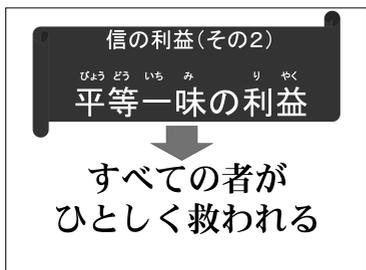


- 「不断煩惱得涅槃」を、水に沈む性質をもった石が、その性質のまま船によって運ばれるという「船と石のたとえ」で解説した。
- 蓮如上人はこのようなそのままの救いを、「信心がおこったそのとき、罪がすべてみな消えるというのは、信心の力によって、往生が定まったときには罪があっても往生のさまたげとならないのであり、だから、罪はないのと同じだ」という意味である。しかし、この世に命のある限り、罪は尽きない」（『蓮如上人御一代記聞書（現代語版）』30頁）とされている。

2「平等一味」

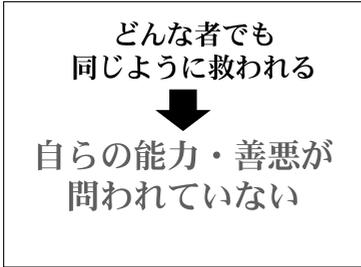
「凡聖逆謗齊回入 如衆水入海一味」（2句）

現代語訳：凡夫も聖者も、五逆のものも謗法のものも、みな本願海に入れば、どの川の水も海に入ると一つの味になるように、等しく救われる。



- この二句は、阿弥陀仏の救いの平等性を、どんな川の水も海に注げば同じ塩味になるという平易なたとえによってあらわしたご文。浄土真宗の救いのイメージをもちやすいところである。
- 本項では、「五逆・謗法の者の救い」と第十八願文の「唯除五逆誹謗正法」が齟齬をきたしているのではないかという質問が出ることがある。ちなみに、本項に限らず、「悪人の救い」といった内容が出る時には、「唯除五逆誹謗正法」との関係を質問されることが多い。この質問に対しては、『尊号真像銘文』の「〈唯除五逆誹謗正法〉といふは、〈唯除〉といふはただ除くといふことばなり。五逆のつみびとをきらひ誹謗のおもきとがをしらせんとなり。このふたつの罪のおもきことをしめして、十方一切の衆生みなもれず往生すべしとしらせんとなり」（註644頁）という、五逆謗法の者の救い

を示すご文によって答えることができる。

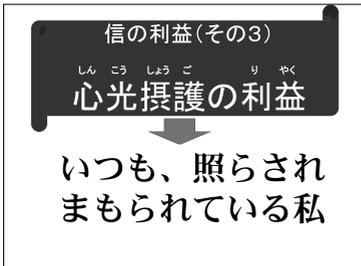


○浄土真宗の教えが私たちの生活と無関係ではないことを示すために作成したスライド。私たちの世界の価値観では、能力が高く役に立ち、善い人が評価される。そういった世間の「物差し」とはまったく異なる、一切を問わない仏の「物差し」を示すことによって、ぬくもりのある浄土真宗の教えの魅力を伝えることができると考えた。

3「心光摂護」

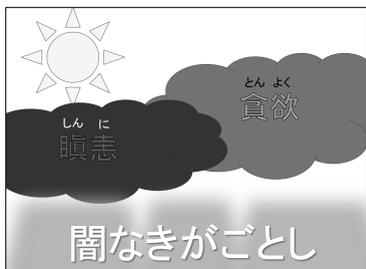
「摂取心光常照護 已能雖破無明闇 貪愛瞋憎之雲霧 常覆真實信心天
譬如日光覆雲霧 雲霧之下明無闇」（6句）

現代語訳：阿弥陀仏の光明はいつも衆生を摂め取ってお護りくださる。すでに無明の闇ははれても、貪りや怒りの雲や霧は、いつもまことの信心の空をおおっている。しかし、たとえば日光が雲や霧にさえぎられても、その下は明るくて闇がないのと同じである。



○阿弥陀仏の光明に摂め取られる利益を示した段。「摂取心光常照護」の「心光」とは仏心の光であり、信心の人を摂め護る「摂取の光明」を意味する。「心光」に対し「色光」と言われる光明は、「調熟の光明」と呼ばれるもので、いまだ信心をいただかない者を信心をいただくように育てる光を意味する。

○本項の六句のうち、初めの一句「摂取心光常照護」が心光摂護の利益を示し、二句目以降は、初めの一句を詳しく述べたものであり、心光摂護の利益の中にある者の状態が説かれている。

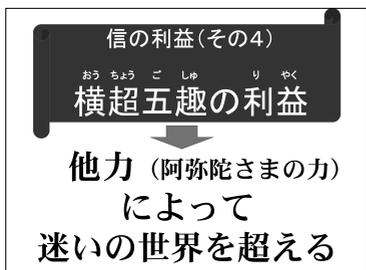


- 「已能雖破無明闇～雲霧之下明無闇」の解説。このご文では、「無明の闇を破す」の「無明」が、「痴無明」（すべての煩惱の根源にある無明）なのか「疑無明」（本願に対する疑い）なのか解釈がわかるが、本教材では譬喩を厳密に解釈することを避け、救いのイメージを大まかにつかんでもらうことを優先した。「無明の闇を破す」「闇なきがごとし」については、「救いが間違いないこと」と捉え、本願を信ずるものにも煩惱はおこってくるが、煩惱は阿弥陀仏の救いのはたらきのさまたげにはならないと説明する。
- 救いが届くということは、喚言すれば、自らの迷いのすがたがはっきりとわかるということである。まったくの闇であれば、雲霧（煩惱）さえも見えない。雲霧（煩惱）が見えるということは、救いの光が届いていると味わうことができる。

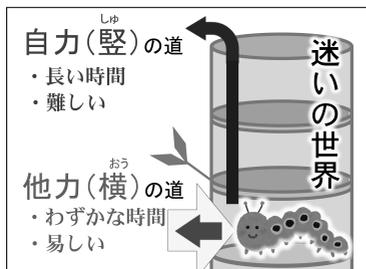
4「横超五趣」

「獲信見敬大慶喜 即横超截五惡趣」（2句）

現代語訳：信を得て大いによるこび敬う人は、ただちに本願力によって迷いの世界のきずなが断ち切られる。



- 信心の利益として、迷いの世界である五惡趣（地獄・餓鬼・畜生・人間・天）を本願力（他力）によってはなれることが示された一段。

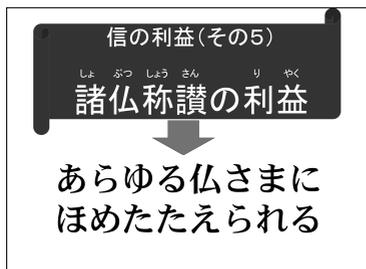


○「即横超截五悪趣」の「横超」（横さまに超える）のイメージを、竹筒から出る虫のたとえによって示した。竹の中の節を一つ一つ上に向かって破り、豎に竹から出るイメージの自力（豎）の仏道と、竹の外皮が外部からの力によって破られ、その穴から出るイメージの他力（横）の仏道を対比させている。自力の仏道は、自ら一つ一つ煩惱（節）を断ちきり迷いの世界（竹）から出るため、長い時間がかかり難しい。一方、他力の仏道は、阿弥陀仏のはたらきによってこの命終えると同時に迷いの世界を出て成仏するため、速くて易しい道である。

5「諸仏称讃」

「一切善悪凡夫人 聞信如来弘誓願 仏言広大勝解者 是人名分陀利華」
(4句)

現代語訳：善人も悪人も、どのような凡夫であっても、阿弥陀仏の本願を信じれば、仏はこの人をすぐれた智慧を得たものであるとたえ、汚れない白い蓮の花のような人とおほめになる。



○信心の人があらゆる仏がたにほめられるような尊い存在となることを表したところ。本教材では特に、煩惱の中にならながらさとりの花を咲かせる信心の人を、泥沼に美しい花を咲かせる白蓮華（分陀利華）にたとえた内容に注目した。



○泥沼に咲きながら泥に染まらない白蓮華のように、信心の人を煩惱をもちながら煩惱に染まらない存在と味わっている。つまり、信心の人は煩惱にまかせて生きることをよしとしない、煩惱を抱えた自らに開きなならないということである。実るほど頭の下がる稲穂のように、教えを聞くほど自らの身が反省され、謙虚な生き方をするのが信

心の人である。

- 親鸞聖人の時代には、どんな人も救われるのであるなら何をしてもいいという誤った理解をする人が問題となっていた（造悪無礙・造悪無慚）。現在でも、「悪人の救い」を説く真宗には、倫理を無視した教えであるという誤解がある。親鸞聖人は造悪無礙については、「わざとしてはならないことをし、思ってはならないことを思うような人は、まったくこの迷いの世界を厭うことがなく、この身の悪を知らないので、念仏しようという思いもなく、本願を信じる心もないのです」（『親鸞聖人御消息（現代語版）』註17頁）と批判している。

(2)自力の誡め

「弥陀仏本願念仏 邪見憍慢悪衆生 信樂受持甚以難 難中之難無過斯」
(4句)

現代語訳：阿弥陀仏の本願念仏の法は、よこしまな考えを持ち、おごり高ぶる自力のものが、信じることは実に難しい。難の中の難であり、これ以上難しいことはない。

③自力の誡め^{いまし} 疑いを誡め、 信心をすすめる

- 依経段後半の最後の項目。自力のものが阿弥陀仏の本願を信じることは不可能であることを示し、自力疑心を誡め他力に帰すべきことを勧めるところ。
- 「信樂受持甚以難 難中之難無過斯」については、「信じることが不可能」という解釈と、罪惡深重の凡夫が浄土に往生し仏となるという教えは信じる事ができないほど素晴らしいという「教え（法）の尊さ」を表すとする解釈がある。本教材においては前者で解説している。

じゃけん 邪見 = よしまな見解。
仏法を否定する考え。
きょうまん 憍慢 = おごりたかぶる心。
自分をたよる心。
「そのまま救う」
という阿弥陀さまの救いを
拒絶する者のすがた

○「邪見憍慢悪衆生」とは、阿弥陀さまの「そのまま救う」という無条件の救いを否定したり（邪見）、私は自分の力でさとりを開くことができる（憍慢）などと考えて、阿弥陀さまの救いを拒絶している自力疑心の衆生のすがたを表している。

自力疑心の人が、
救いにあずかることは
不可能
↓
自力疑心を捨てて、
阿弥陀さまに
まかせなさい

○「信樂受持甚以難 難中之難無過斯」の「難」は「困難」ではなく、「不可能」を表す。本願を疑う自力の人が本願を信じることは絶対に不可能ということであり、ひいては救いにあずかることができないということである。よって、親鸞聖人は、自力の心を捨てて、阿弥陀仏にまかせよと勧めている。

以 上

【講座風景】（2017/7/23 神戸別院にて）

